

キリスト者と呼ばれて

「愛する人たち」と、ペテロはここで仕切り直すかのように再び、人々に呼びかけています。この人々は、「ポントス・ガラテヤ・フリギア・アジア・ピディニアの各地に散らされて仮住まいをしている選ばれた人たち」と手紙の最初に書かれていたのを覚えておられると思います。手紙の終わりに差しかかり、ペテロは筆を取り直して「愛する人たち、あなたがたを試みるためにふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。」と書き送るのです。転がる岩のように、蹴り飛ばされるかのように故郷を追われて、離散して仮住まいをしている者たちに、さらに試練が降りかかることを驚き怪しんではないというのです。すでに難民状態にひとしい状況の彼らのうえに降りかかる試練、それはキリスト者であるがゆえに受けることになった苦難であるとペテロはここまでも述べて来ましたし、彼らがなぜそれに耐えることができるのかの根拠も示してきました。そして、いまダメ押しするかのように「むしろ、キリストの苦しみに与れば与るほど喜びなさい。あなたがたはキリストの名のために非難されるなら幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊があなたがたの上にとどまってくださるからです。～キリスト者として苦しみを受けるなら決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神を崇めなさい」と言うのです。この「キリスト者」、ギリシア語で「クリスチアノス」という言葉は新約聖書には 3 回しか使われていません。使徒言行録 11 章に出てくるのが初めてで「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである」とあります。もう一箇所も使徒言行録で、パウロが捕らえられてローマへと護送される途中、尋問にあたったアグリッパ王が「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしま

うつもりか」と言った言葉のなかに出てきます。すでに地中海世界である程度、クリスチャンに対するある認識が出まわっていることがわかります。そして、新約聖書に収められている手紙のなかではペテロの手紙のここだけに「キリスト者」(クリスチアノス)という言葉が使われています。このクリスチアノスの意味するところですが、歴史的には、プロテスタントや、メソジストという名前と同じたぐいのものです。つまり、わたしたちの外側からつけられた名称、それも揶揄するような、一種、軽蔑のニュアンスを含んだレッテルということです。十字架で刑死したナザレのイエスをキリストと信じるおかしなやつらぐらいのニュアンス。プロテスタントは「抗議するめんどくさい連中」ということすし、半田教会の信仰的ルーツであるメソジストはメソッド・イスト、ですから、「お固いやつら」といったネーミングです。これが当時の人々の認識であったわけです。もし今日、クリスチャンと名乗ることに抵抗がないのだとしたら、それはこの手紙にありますように、イエスをキリストと信じて生きた人たちが積み上げてきた証の歩みの結果です。この手紙の3章にこういう言葉がありました。「終わりに、皆心をひとつに、同情しあい、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい。悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。命を愛し、幸せな日々を過ごしたい人は、舌を制して悪を言わず、唇を閉じて、偽りを語らず、悪から遠ざかり、善を行い、平和を願って、これを追い求めよ。主の目は正しい人に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。～もし、善いことに熱心であるなら、誰があなたがたに害を加えるでしょう。しかし、義のために苦しみを受けるならば幸いです。人々を怖れたり、心を乱したりしてはいけません。心のなかでキリストを主とあがめなさい。あなたがたが抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。それも穏やかに、敬意をもって、

正しい良心で、弁明するようにしなさい。そうすれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じるようになるのです」、とあります。ペテロの立場は、神の御心であるならば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりよい、というものです。離散して仮住まいをしている者たちは、いわば現地の人たちからすればよそ者ですから、この人達は何者だろうという目でとうぜん見られますし、その信じていることが行動にも現れるのですから、当時の習慣やしきたりにではなく、神の言葉に従って歩むことを志すキリスト者は理解を超えた存在として、罵られることもあったことは想像できます。クリスチャノス！とか。プロテスタント！とか。あいつらメソジストだぜ！とか。キリスト者（クリスチャン）という言葉が、日常のなかで、わたしたちに向けられるとき、わたしの経験ではあまりいい意味では使われない場合が多い。クリスチャンのくせに、といったたぐいの物言いを、20代のころ、キリスト教主義の学校につとめていたときに聞くことができました。あの先生はクリスチャンのくせに、といった使い方です。こういう場合、大体ふた通りあって、今日の手紙の中でペテロが釘を刺したように、あなたがたのうちで誰も、人殺し、泥棒、悪者、あるいは、他人に干渉する者として苦しみを受けることがないようにしなさい、とふつうに考えて悪いことをしてキリスト者の評判を落とすような場合に使われる「クリスチャンのくせに」、これはペテロに言わせればもってのほかです。もうひとつは彼らの理解が及ばない。キリストを証しして、キリストに忠実であることによって人々から受ける誤解や、無理解、不利益、その先にある苦しみ、迫害、殉教であるならば恥じてはならないと繰り返すのです。試練を受けることはクリスチャンにとってなんら不思議なことではない。驚きあわてるな。天に国籍をもち、そこを見据えて歩むあなたがたの歩みが、地上で帳尻のあうような生き方になるはずがないとペ

テロは確信しています。なによりもキリスト・イエスご自身がそのように神の御心に生きて、人々から捨てられ、十字架につけられたという厳然とした事実がある。しかも、わたしたちはこの刑死したナザレのイエスが、わたしの罪を赦すために進んで十字架の死を受けられ、三日目に復活して死を滅ぼした神の子である、わたしのキリスト＝救い主であると信じて、告白をし、歴史の中を歩み続けきた天を国籍として歩むキリストの体である教会に加えられた者です。地縁や血縁といったこの地上ではばを利かす縁(えにし)をこえた信仰によって結び合わされた兄弟姉妹と生きる新しい共同体に加えられている。キリストを土台とし、頭とする恵みによって結び合わされた群れ、それがわたしたちの自己理解です。クリスチャンとはそのような生き方に招かれた冒険者たちの集まりですね。その冒険は日常をキリスト者として生きるという冒険です。神の御心を聖書を通して知らされ、祈り、侮辱されても赦し、相手のために祈り、キリストの御足のあとを自分の十字架を負って歩む者へと変えられてゆく。約 2 千年前の小アジアで離散した仮住まいの彼らと、わたしたちの生きる世界は異なっています。今日では歴史のなかで積み上げられてきたキリスト者の証によって全体的なイメージは多少はましになっているでしょう。しかしでは日曜日に教会に人が押し寄せるかということとそういうことは起きていません。むしろ思い思いに自分の道をゆくことをよしとする歩みはこれは昔も今も変わることはありません。人々は自分の利用できる範囲でキリスト教を使うだけでしょう。その意味では無理解や誤解、日曜日に礼拝に行くことも、献金することも不思議に思われるでしょう。キリストを愛して生きるということ、キリストが愛された自分を愛し、同じように愛された者を兄弟姉妹として愛して生きる群れを立ち上げてゆくことは、だから冒険ですし、キリストに従う生き方によって軋轢はとうぜん生まれます。驚き怪しんではならないと

いうペテロの忠告は本当にその通りなのです。苦難や試練のない人生はありません。しかしそれはどういう苦難なのか、わたしたちの窓の歩みがもたらす苦難であってはならないとペテロは言う。たとえ品行方正に歩んだとしても、わたしたちの歩みが死で区切られている以上、苦難はかならずくるものです。そして、苦難と死は、わたしたちが何の許で生きているか、何を頼りとしているかを明らかにする。火で精錬されて不純物がとりのぞかれていく金属加工が時々聖書でも例えにひかれますが、試練は、わたしたちの心を顧みる時、神さまに対する信頼を増す機会となるのか、それとも神以外に救いを求めていくのか、わたしたちは自分に与えられた試練を通して、キリストの道を歩むのか、イエス様が決断をし、歩まれた道を往くのか、それともそこから離れていくのかが問われる。ペテロの勧めは 19 節にありますように「神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねさい」です。これは神がわたしたちを苦しみに遭わせることを意志しているということではなく、苦しみを受ける人は神の御心に従って、善い行いをし、その結果を神さまに委ねなさいという、摂理の信仰を言い表しています。つまり、神が、わたしのためにすでに独り子であるイエスを十字架にかけておられるのですから、神さまがわたしに出し惜しみをされることはありえない。必要な助けはかならずなされることを信じてよいということです。恵みのご支配を信じて生きよということです。創造主である神に委ねることが平安の基礎であるのは、この方がわたしの贖い主となられたキリスト・イエスの父であるからで、その父の御心はわたしたちが一人も滅びることなく救いに入るためであることが、イエス様の十字架と復活のご生涯から確實だからです。この復活をペテロは生ける希望として語ってきたのを覚えておられると思います。これは苦しみに縁取られたわたしたちの命、死でかならず終わる

わたしたちの命が創造主の御手のなかにあって新しい命の道へと移されるという約束です。苦しみが続く時、わたしたちはどうやって耐えるでしょうか。それはかならず終わることを知っておくことです。そしてその終わりが死ではなくて、ここがポイントだと思うのですが、福音を知らない人が十字架のキリストを知らず、みずからの罪のゆえに迎えるであろう終わりとしての死、その先に待ち受ける死んだら終わりとうそぶくような虚無を、わたしたちは退けることが出来るということです。キリストの十字架と復活が天に蓄えられている朽ちることも萎むことも汚れることもない生き生きとした希望となる。この終わりについての希望、神がわたしたちを贖い、この世を贖って下さるといふ終わりの日に対する希望の福音こそが苦難によっても揺るがされないクリスチャンの平安の基礎なのです。ここから宗教改革者マルティン・ルターの言葉とされる有名な「明日世界が滅びるとしても、わたしは今日、りんごの樹を植える」という生き方もうまれます。これはエルサレム落城寸前にもう敵国の占領下に置かれ、無価値になるのに、神の御心に従ってアナトトの畑を銀で正規の料金で買ったエレミヤと同じように、キリスト者がこの世界だけを見つめていないことを示します。このような信仰による落ち着き、平安を得て生きることもキリスト者の冒険です。そしてそれら全ては救いの担い手が神さまご自身であって、わたしではない。わたしの信仰でもない。キリスト・イエスのご生涯に示された神の愛と憐れみによることを知っていること。この恵みの消息を知る喜びを分かち合って生きることに、わたしたちクリスチャンの慰めと力があります。それは天国を指し示す証の働きでもあります。

お祈りいたします。